

「ハイ、妻は〇〇會の相談があるとか申しまして、其方へ参つてしまひました。」

「相變らず御勉強で御座います子。實は私の方へも案内が参つて参りましたが、子供達がやかましいもんで御座いますので、此方へ引張られて参りました。どうせ彼方へ参つたつて、私共などは何も申す事は御座いませぬ。只他人様の御話を伺つてゐる斗りなんですから、こちらの方が却つて宜しいかも存じませぬ。第一……子供達が喜びますだけでも子……ホ、ホ、。」

「ミ、聞かない事まで仰有りましたが、これが又此方のお子様方には、ざれ程お感じになりましたらう。お嬢さん同士は顔見合せて、」

それより時々手申擦らされたのは、もう一つの御病氣の起つた時なんです。

つい今の先まで、長閑に晴れ渡つた様な御機嫌で居らしたのが、急にまた曇り出して、雷まで鳴り出さうと云ふ勢ひ、此方が右と云へば、左と出られ、東と云へば西と仰有るんでせう。それがまた、日に何度と云ふんだからたまりませぬ。

その代りまた事によるミ、悪い時の返して、丁度夕立の後の様に、ケロリと御機嫌が立ち直るミ、その弾みに拍子付いて、

「オ、これお〇さんにあけませう。ついでにこれも欲しけりや……」

「……」

「ミ、お側にある物は云ふまでもなく、時には指に穿つて居る物まで、」

わざく取つて下ださるんでせう。初めは何だか氣味が悪いので、後
でそつちお返し申さうとします。お附の女中さんが手を振つて、
「餘計な心配おしでないよ。そんな事でも無かつた日にやア、この
お守りは勤まりやしないや子。私だつて御覽！ もうこんなに戴い
てるんだよ。」

「そ、そつち行李を明けて見せられたので、私もすつかり安心して、
そのまゝ、いたゞいさく事にしてしまつたんです。」

「けれど、こんなにボイ／＼と、他に譯無く遣つてしまひになつた
ら、しまひには肝腎の御當人が、まるで裸にでもお成りになりやし
ないか。心配すればされもしましたが、そこがまた御方便なもの
で、御當人にはまた旦那様云ふ、頗る好い方がついてらして、

一週間目々々々に、飲かさず御見舞に入らつしやる度には、屹度
また御土産を飲かした事が無いんですの。

「お土産云つたつて、青柳の栗饅頭や、風月のシュークリーム、
そんな物斗りぢやありません。三越や白木の包紙でくるんだ、嵩は
抵いが價の高いもの。指輪があつたり、簪があつたり、ピンがあつ
たり、ブルロージがあつたり、それから半襟、シヨール、手提、其
他袋物や玩具の様なもので、今度は何々が欲しいと仰有れば、アイ
ヨ／＼と持つた来て下ださる。此次には是々々、御注文が出れば、
よし／＼と皆呑込んで居らつしやる。ほん／＼にあんな旦那様は、滅
多にある譯のものぢやありません。あれで男振が好かつたら、それ
こそ武男さんも跳足だらうつて、蔭で女中達が云つてた位ですの。」

これほぎにして居らしつても、奥様の方では別にお嬉しくないんでせうか。いゝね、そんなにされればされるほぎ、尙附け上げるごでも云ふんでせう。折角東京から持つてらしつたものでも、三日か四日で直ぐ私達に下だすつておしまひになるんですよ。

「まア勿體無いぢや御座いせんか。わざわざ旦那様が持つてらつしやいましたのに。」

「まアに關はないんだよ。また買つて来て貰ふから。」

「まアたまりませんね。旦那様もお可哀さうに。」

「心安立にこんな事まで云ひますご。」

「イヤ、子供のお供云ふものは、存外氣骨の折れるちんですなア、何しろ此頃の電車の雑踏ぢやア、實に冷々させられます。」

「その代りかう云ふ所へ來こりますご、自分まで子供になつた様で、まごごに暢氣で御座いますよ。」

「イヤ、子供のお供云ふものは、存外氣骨の折れるちんですなア、何しろ此頃の電車の雑踏ぢやア、實に冷々させられます。」

「その代りかう云ふ所へ來こりますご、自分まで子供になつた様で、まごごに暢氣で御座いますよ。」

「これはまた餘ほぎの子煩悩に見えて、折から側に居たお子さん同士が、何かふざけ合つた弾みに、カップが倒れてこぼれたお茶の、

子供のお供

御自分の膝へ掛るのさへ、何とも云はずナフキンで、靜かに拭いて居らつしやいました。

一四 出で 養 生

おやく、さうさう、あの方もお歿になりましたのね。お氣の毒様な！私も去年から半歳斗り、そのおかゝりになつて居て、随分頂戴物をした御恩もありますから、御葬には所詮參れないにしても、せめてそのお日柄には、御精進でもしなければなりません。

全くふしぎな御縁で、私はあの方に、ほんごに御最負になつたのです。大勢居る明輩の中から、妙に私がお氣に入つて、折角東京か

らお連れになつた、看護婦やお女中が居るのに、又してもお○さんく、私斗りお呼びになつて、何かの御用をお命になるんですもの。

私も冥加に餘つて、精一杯お世話はしたつもりですが、それでも心の底を明かせば、實は最負の引倒し、思はない事ありませんでした。

何しろ御病氣が御病氣でせう。わゝ、やはりその胸の御病氣の上に、ヒステリーもかッ手傳つてるんでせう。その御氣のむづかしさ云つたら、お話にもならない位なんです。

尤もあゝ云ふお綺麗な方には、得てかう云ふ御病氣の出るのは、不如歸の浪子さんでも知れてますが、それもあゝ長くなるご、自然

出 養 生

出 産 生
お氣がぢれ込んで来て、もう一つの病氣まで起るのは、考へて見る
ご無理はありません。

ごうせかう云ふ所へ来て、長く御滞留なさらうご云ふには、よく
く難しい御病氣のあればこそで、強ちあの方に限りはしません。
ですから私達は、來たては随分氣味が悪うございましたが、遂に
は段々ズウ／＼しくなつて、なアにバイキンさか云ふもんだつて、
此方が恐がるから飛びつくんだ。度胸を据ゑて氣を強く持てば、先
方から頭を搔いて逃げ出すだらうご、高を括つて掛る様になりました。
た。

ですからかなり甚いのに出くはして、鼻の先で咳き込まれたり、
目の前に赤い物を吐かれても、平氣で世話をしてあげたのですが、

「そんな餘計な心配が要るもんか子。いくら買はしたつて可いんだ
よ。」
ご、かうです。

まア偉い御見識だごご。一體また何だつて、旦那様にそんな弱味
があるのだらうご、内々女中さんに聞いて見ましたら、女中さんは
一寸考へてましたが、

「まア云はない方が可いでせう。」
ご、乙に氣を持たせるぢやありませんか。
さうなるご尙聞き度くなるものです。私はひつこく聞いて見まし
たら、

「それは仕方が無いでせう。奥様があんな御病氣になつたのも、原

出 産 生

出 巻 生

はご云やア旦那様が御悪いんだから。」

ご、云はれましたが、それがまた私には解りませんから、

「だつて不思議ぢやありませんか。旦那様はあんなに御丈夫らしいのに。」

ご、云ひましたら、

「お前さんも野暮だね。旦那様のせいだつて、何も傳染つたつて云ふんぢや無いよ。」

さアいよく解らなくなりました。で、私は氣になるから、

「それぢやア一體何うしたのよ。後生だから云つてちようだいな。私誰にも云ひませんから。」

ご、尙ひつこく聞いたので、やつこの事解りました。

出 巻 生

それは斯う云ふ事なんです。旦那様ご云ふ方が、あゝ見れてあまりお堅くないんですつて。………それも今の事ぢやありませんが、一時………何でも奥様の悪くお成り初めに、病院へすつごお入りになつて居る間つまりまア………お淋しかつたからでせうが、一寸變な事があつたんですつて。それも新橋ごか赤坂ごかの、氣の利いたのならまだしもですが、何でも相手は祿でもない、何處かの半素人なんでしたが、生憎それに赤坊が出来たごかで、一時大層な騒ぎが持上つたんです。

それ以來旦那様は、すつかり信用が無くなつたんです。その癖御當人はすつかり懲りて、それつきり大人しくお成りだつたんです。が、一旦さう云ふ事があつて見るご、もう押しが利きません。

そこへ持つて来て、奥様は御病氣が永びくに連れて、段々氣がひがんで入らつしやいませう。それで氣が廻ればまはるほぎ、旦那様の御様子が一から十まで怪しく見わたる。まア青い眼鏡をかければ、何でも青く見ゆる様なもんです。それで又しても奥様は、旦那様を捉へてお焼きになる。それがつらさに旦那様は、何うかして信用を恢復さうと、萬事につけて下た手にお出になる。下た手に出られ、ば出られるほぎ、尙付け上つて無理を云ひつゝのるこ、云はゞいたちごつこになつて、さうくあんな風に成つしまひなすつたんです。

なるほぎさう聞けばさうかも知れません。ある時なんぞはこんな事がありました。丁度旦那様の來てらつしやる時でしたが、私は郵

便か何か持つて、御部屋の方へ行かうとする、看護婦さんも女中さんも、廊下の所に立つてるぢやありませんか。

でもかまはず行かうとする、二人が手を振つて留めるぢやありませんか。

「まア何うしたの？」

こ、小聲で聞く、女中さんも小聲になつて、

「今入つちや大變だよ。」

こ、云ふんです。

「何うかなすつたの？」

こ、聞きかへすこ、

「まア可いから後におし！」

「ミ、何だかまた解らなくなりました。」

で、郵便はそのまゝ女中さんに渡して、私は其所を来てしまいましたが、何だかまだ氣になるので、罪な事は思ひましたが、その裏階子から廻つて、後の方の廊下へ行つて聞くミ、中から奥様の泣き聲が、しきりに聞けて來るのです。それも只の泣き聲ぢや無いので、まるで子供がダ、を控ねてる様なんですの。

「するこまた旦那様は、……はつきりした事は解りませんが、しきりに云ひ聞かせて居らつしやるのが、まるで阿父様かなんぞの様でした。」

かと思ふミ、その日の夕御飯の時には、お二人も忘れた様になつて、罪もない冗談なんぞ云ひ合つてらつしやるのが、何の事はな

「い、年の行かぬ御兄妹同士の様ですの。」

私はまるで呆氣に取られて、此時ばかりはいつもの様に、無駄口云つてお座を持つ事が、却つて出来なくなつた位です。

で、後で女中さんに聞いたら、

「なんでも此前に入らした時、旦那様の仰有つた事が、今度入らして仰有つた事ミ、少し異つてるミか何ミか原で……それから御冠が曲つたんだよ。」

ミ、云ふんです。

そのせいでもありませんたらう。まだ夏頃まで居らつしやる筈のが、別に快くもお成りでないのに、急にお歸りになつてしまつたんです。

所ところがやはり御無理ごむりだつたんでせう。お歸りかへになるに間もなくあの通りどほ。して見るにいくら氣は揉めても、やつぱり離れて居らした方が、御體おからだの爲めには可かつたんですね。

一五 監視夫人

ほんごに私は、あんな馬鹿々々しい事は御座ございませんの。元よりこんな稼業かげふを致いたしてゐますから、するぶん種々な御座敷ござしへ出て、いろんな方かたにお目めにかゝれば、またいろんな事ことに出でくはしめます。御最負ごひいきにして來ていたゞくからには、一度は御挨拶ごあいさつに出なければなりませんので、萬遍無まんべんなく顔かほを出してまはりますのに、何れもお客大

明神様みやうじんさま、御利益ごりやくには多少高下せうかうはあつても、御扱おあつかひに微塵差別みじんさべつがあつては、商賣冥利しょうばいめいりに盡つきやう云ふものです。

こんな了簡れうけんで居りまするか、難有ありがたい事ことには、こんな者ものでも彼是かれこれ仰有おつしやつて下だすつて、今ではまアお蔭様かげさまで、土地ちちでも一番繁昌はんはんじやう致いたす様やうになりましたのも、一つはお内儀うちぎの程ほどが好いいからだご、皆みなさんが煽動おだて下さいますのに、何も好いい氣きで乗る譯わけぢやありませんが、全くそれそれも然さうだらうご、我乍われなら思おもひます位くらゐ、稼業大切かげふだいじに思おもへばこそ、大抵身體たいていからだの具合ぐあひが悪わるい時ときでも、お客様きゃくさまの御座敷ござしへ出さへすれば、直すぐに忘れてしまふ様な氣きで、時には割われさうに痛いたむ頭かたまを、無理むりに撫なでつけて御相手ごあひてに出て、お茶ちやを濁にごして來る事こともあるのです。で、此間このあひだの〇〇様さまの御座敷ござしなどは、全くそれの一番いちばんはけしい時ときだ

つたのです。二三日つゞく大きな宴會に、すつかり草臥れきつて居る所へ、半僧前の晩から少し風邪を引き添へたので、實際あの日はお午後まで、枕があがらずに居たんです。

所へ女中が來ての通告に、「〇〇様が入らつしやいました、而も奥様をお連れになつて。」云ふぢやありませんか。

〇〇様云へば、長い間のお馴染です。始終△△に居らつしやる方ですが、御用で此邊へ御出張の時は、きつこ遊びに來て下さるんです。

他の方なら何ぞか云つて、今日丈は御断りしたいと思つたのですが、何しろさう云ふ珍しいお客様、それに奥様も御一所だに聞いでは、お目に掛らなけりや悪い様な氣がして、さうく無理に起き

てしまひました。

急いで御風呂に入る所を、身體丈拭いておいて、あつさり身仕舞して、髪は撫でつけた丈で御免蒙つて、衣服もあまり目立たないのに着更へて、それからそのお座敷へ出て参りました。

「まア、久瀾！よくお出で下さいました。」

こ、例なら直きにその側まで行く所ですが、奥様が御一所ですから、まづ屏風の所でお辭儀をして、それから先方様のお言葉を待つて、やつこお膳の近くまで出たのです。

「オ、お内儀！ 相變らず繁昌で結構だ子。これは僕の案内だ。今度一所に連れて來たんだが、一度お内儀にも會ひ度い云ふから、今日はわざと連れて來たよ。」

隣夫人

「ご、隣の御婦人をお指しになりますから、私はまた改めて、初対面の御挨拶を申上げるのに、口数はあまり仰有いませぬけしも、毎度身人がお世話になつてます……」なぎ、物馴れた御様子、あの名高い實業家の、御嬢さんとも思へない位……尤も御年は三十四五……さう申しては何ですが、好みが少し粹過ぎるので、折角の御容貌が、それ者上りにも見ぬ度がるのです。

「けれども却つてその方が、私達には氣が詰らないで可い、結局高を括つてかゝれました。

尤も〇〇様云ふ方が、随分程の好い方ですから、私達が出て居ても、いつも詩間の經つのを忘れる位なのです。

「ごうだ、少し不決つて云ふぢやないか。あんまり儲かり過ぎるか

らだらう。

「ご、いつもの調子で罪の無い皮肉を仰有る。此方も平生なら負けない氣になつて、その返し矢をするのですが、何を云ふにもこの晩は、初対面の奥様が側に居らつしやるから、私はわざと生真面目に、

「いゝわ、さうぢや御座いませぬよ。少々風にやられました。」

「ご云ふご、今度は奥様が、

「それはいけませんねエ。ぢやア寝てらしたの？」

「ご、氣のせい髪を御覽になる様です。

「ハイ……ナニ、大した事ぢや御座いませぬが、つい毎晩更けるもので御座いますから。」

「ご、云ひかけるご、〇〇様は横間から、

隣夫人

「更ける斗りなら可いだけども、飲み過ぎるから悪いんだよ。だ
がさう云ふ時には、却つてお迎ひをやる方が可い。さうだお前盃
をおあけ！」

こ、仰有るので、奥様はお猪口をこつて、

「では失禮ですが……」

こ、指して下下さいました。

私はそれをうけ取るこ、側に居る○子が酌をしてくれましたが、
此時丁度私が、一寸眉をよせたので、それと察してか半分よりつぎ
ませんでした。

それからまた種々な事を、聞いたり話したりして居る間、私は時
々奥様の方を見るこ、奥様も亦私の方を、又してもちつこ見て居らつ

しやる様で、時々目こ目がバツタリ會つて、ハツこ思はせられる事
もありました。

その中に○○様は、段々御酒が廻つて来るこ、一層お口が軽くな
つて来るのです。それには一座の者が、皆お腹を擦らせられるの
に、何うしたのか奥様は、一人につこりこもなさらないで、何だか妙
に考へ込んでおしまひになる。

「何うした？大層大人しくなつたぢやないか。」

こ、旦那様は仰有いました。しかもその優しさは、まるで子供に
でも云ふ様に。

けれごも奥さんは、丁度またすねた子供の様に、顔を斜に傾けな
がら……返事もなさいません。

「頭でも痛いかな？」

「こ、更におやさしいのに、そのお頭を無言で振つてらつしやいます。」

「ぢやあ何うだね。一杯やらんか！」

「もう澤山！」

「そんなら飯貫はうか。」

「はゝ。」

やつと解つたこ云ふ風に、〇〇様は此方を向いて、

「ぢやア御飯にして貰はう。」

「こ仰有いますから、

「畏りました。丁度今、豆の御飯をこしらへこりますから、少々お

待ち遊ばしまして。」

「こ、居台はせた女中が口を入れましたから、

「ウン、それは難有い。これも大好きなんだから。」

「こ、奥さんの方を一寸御覧になつて、さも御満足の様でしたから、

「お前行つて急いごいで！」

「こ、今は女中を立てせました。」

「〇〇様は相變らず飲んでらつしやいます。」

「ごうだもう一つ！」

「こ、また私にお指しになる。元より御断りは出来ません。それをおうけするこ丁度お銚子の所在の都台で、お酌まで御自身でして下さいました。」

「ミ、それをまだ下に置かない間に、奥様はお立ちになりました。用場へご思ひましたから、私が御案内をご思ひましたが、生憎私はいたゞいた斗りの、お盆がまだ手にありましたので、〇子が代りに立つてくれました。そして奥さんの御供をして、その方へ出て行つたのです、

後には勢ひ〇〇様ご、私はさし向ひになつてしまひました。

「ほんごに好い奥様で居らつしやいますご。伺つては居りましたが。」

私は萬更お世辭でもなく、思つた通りを云ひますご、〇〇様は一寸首を傾けて、

「あんまり好くもないのさ。」

「勿體無い。そんな事仰有るご罰が當りますよ。」

「全く罰が當つたんだ子。その癖あんまり罪を作つた記憶はないが。」

「何ですつて？」

「イヤ、あゝ見えて大のコレなのさ。」

「ミ、食指を立て、額の所へ持つてらつしやるのです。」

「まア……、大層捌けてらつしやる様ですのに……」

「萬更野暮に仕込んだつもりぢやないが子……」

「やつぱり罪をお作りになるからでせう。」

「所が何うして……あゝ何所へでも監視付なんだもの……よろしく御察しを願ひ度い子。」

「でもそれほごに思つてらつしやるんですから、仇になすつちや濟みませんワ。」

「これはいよく旗色が悪いな。」

「ご、頭を掻いて居らつしやる時、私は先刻のお盃を返へして、序に御酌をしたのです。」

丁度その時、奥さんは用場から歸つて居らつしやいました。が、何故かツウンと立つてらつしやいます。

「何うしたんだ？ 坐らんか。」

「〇〇様は仰有いしましたが、奥さんはそれにかぶせて、

「郎君もつ参りませうよ。」と、何だか速口に仰有います。

「今飯が来るんだよ。」

「御飯なんぞ宿でも食べられます。郎君御厭なら、私一人で参りますワ。」と、ますます御様子が変わちやありませんか。私は驚いて、
「まアお宜しいぢやございませんか。もう直ぐで御座いますから、何卒召しあがつていらつしやいまして！……。」

と、取りなすつもりで云ひましたら、大失策！

「いゝね、もう私は澤山！あなた代りに食べて下下さい！」と、云ふ中にもう奥さんは、亂箱にあつたシヨールとバックを、引たくる様に取りあけて、椽側へ出ておしまひになり、丁度其所へ御飯櫃を持つて来た、女中にあぶなく衝突する様にして、……はじめは處女……ではない立派な奥さんが、今はさながら脱兎の勢ひ……ソレお留め申さなければと、私は後から追すがらうとすると、後から

果 り 越 し
○○様が押しつけて、

「だから云はない事ぢやないんだ。お前は出てくれない方がいゝんだ。」と、制しながら、これは御帽子も持たないで、女關の方へ追つてらつしやいました。

女中は呆れる、○子は泣きさうになる。私はもう馬鹿々々しくて、腹も立たなければ、笑ひも出来ませんでした。

一六 乗り越し

つい此間の事ですが、市内電車の中で随分をかしい事がありましたよ。

私は銀座で買物をして、尾張町から品川行に乗るに、やがて竹町邊から、ドヤ／＼と客が殖えました。

私は買ひたての雑誌を読んで居て、初めは気がつきませんでした。が、間もなくその客の方から、無遠慮な大きな聲で、

「何しろ大層なハイカラさんなんですよ、云ふのが耳に入つて来ました。」

それが年取つた女の聲なので、まさか私の事を云はれてるのだとは思ひませんでした。念の爲めにその方を見ますと、丁度私の斜向ふに、窮屈相に掛けて居る、二人の老婦人がありました。

一人は切り下げの六十前後、一人は小さな束髪に結つた五十格好、共にかんりの服装をして居ましたが、少し斗り訛りのある言葉

果 り 越 し

で、臆面もなく喋り合つて居るのが、何でも何處かのお嫁さんの噂
なので。

廢せば可いのに、こんな人中で、私は眉を顰め度くなりました
が、其癖耳は敬つても來ますので、目は雑誌に置きながら、聞ゆる
まゝに聞いて居ます。

「何しろ容貌好みで貰はれただけに、そりやア女は好いんだよ。や
づばり學校出で。だからお前さん、すばらしいハイカラだアね」
と、束髪が云ふ。

「何しろ今時の學校出に來ちやア、全く凄いいもんですからねエ。」
と、切下げがうけて居ます。

「それでお前さん！ 何しろ朝が晩いんだらう。やつ三十時前に起

き出すと、ゆうくミ手水をつかつて、御化粧迄が二時間ぢやアな
いか。それから御飯が済むと、自分の部屋へ入つたぎりで、裁縫で
もしてゐるのかと思やア、せつせと小説を読んでゐるんだつさ。夕方に
なつてお風呂が沸きやア、これがまた一時間だらう。」

「まア………そんなに寢坊してゐて、よく旦那が黙つてられるね
エ。」

「それがすつかり巻かれてゐるんだから、からもう駄目なんだよ。何
しろ會社が忙しいから、亭主ももう七時頃にやア出ちまふんだが
手、それでもお嫁さんは起きる所か、寢床に横になつたきりで、行
つてらつしやいが關の山だつさ。」

「まア、呆れますねエ。」

乗、つ、遅、し

「呆れるなアそればかりぢやないよ。夜になつて旦那が歸つて來ても、別に御飯こしらへしこぢやア無し、自分だけ好きな物で先にすましこいて、……郎君なんにもありませんよ。これで済ましこいてちやうだいッて、御香子に佃煮なんかあてがつきいて、自分は平氣で御琴かなんかさらつてるッて云ふんだから、やりきれないぢやないかねエ。」

「まア、まるでお話の様ですなエ。」

「所が事實なんだよ。嘘だと思ふなら○○さんに聞いてごらん。そりやアもうこぼすまい事か！人の顔さへ見りやア泣言云つてるんだよ。何しろ御化粧が二時間、お風呂が一時間……」

「ぢやア旦那の事なんぞ、ちつとも關はないんだと見えます子。」

「關ふどころか、何一つ面倒見るんぢや無いんだつさ。此間も○○さんが、あんまりで見兼ねたもんだから、お前ちつこは臺所の事も氣をつけて、俵の好きな物でも、自分で煮こいてやる様にしておくれなつてつたら、お前さん何うだらう、私そんな事出來ませんワ。自家ぢやア臺所へなんぞ出た事がないんですものッて、てんで仕やうッて氣にもならないんだつさ。」

「だつて今時の學校ぢやア、家政ミか云つて、御料理の稽古もするんぢやありませんか。」

「それノ、それも○○さんは云つたのさ。お前學校で習つた筈ぢやないかッて。さうしたら何うだらう、あの子の云草が憎らしいぢやないか。そりやア習つた事ア習らひましたけれども、私嫌ひだか

「らみんな忘れちまつたのだつて。」

「そんな風だに、裁縫の方も、好きぢやないんでせう子。」

「そりやアもう、針なんぞは何日か日にも持た事ア無いんだよ。仕方がないから袴の綻びまで、みんな〇〇さんが縫つてやる仕末さ。

可愛さうに、あれぢやア折角お嫁さんが出来たつて、〇〇さんはち

つこも樂は出来やしない、却つて餘計な氣骨斗り折らせられて、こ

んな間職の合はない事アありやしないや子。」

「ほんきにこんだのを貰ひあてたもんです子。」

「全くあんなのを引き當てるに、それこそ、百年の不作さアね。」

「ミ、それはく口汚く罵つて居るのです。それが何だかお酒でも飲

んで居るのではないかと思はれる位、四邊に人も無けなので、私は

いよく苦々しく思つて、額越しに睨む様に見て居ますに、その左
右に掛けて居る人達も、少しは呆れた氣味で、この二人を見て居る
のです。

それでも當人達は、一向お關ひ無しで、今度は切下げが辯じ初め
ました。

「全く今の學校出さ來ちやア、ほんきにたまつたもんぢやありませ

んよ。さう云やア私の甥の所のなんぞも、やつぱりその傳で子。何で

も立派な學校を卒業して、先生にもなれるんだか云ふんですが子。

……いね子、こりやア容貌は形無しですが、その、教育のあるッ

てのが望みで貰つたんですよ。所がお前さん、教育があるか何だか

知らないけれども、まるで子供の育て方を知らないんですよ。……

栗 り 越 し

「ね、まだやつこ一人出来た斗しなんです。その一人を持ちあつかつて、カラだらしの無いツちやありやしません。」

「でも阿母さんがしつかりしてらぢやないの。」

「所がその阿母さんが、まるで愛想をつかしちやつて、此頃ちやア別になつちまつてるんですよ。」

「まア、折角孫が出来たつて云ふのに……それぢやア赤兒が可哀さうぢやないか。」

「全く可哀さうなんです。此間も一寸行つて見りやア、床中に入ればなしにされて、まるで火でもつく様に、ヒイ／＼泣いてるぢやありませんか。はやく飲ましてやつたら何うだい云やア、まだ時間が来ないからつて……なんでもお乳の時間が極まつてるん

ですよ。」

「やつぱりハイカラなんだ子。」

「ハイカラだが何だか知りませんが、あんな事しこいちやア、今に蟲が越るよつて云へば、オヤ蟲ツてぎんな物でせう、まだ私見た事ありませんワなんて、老人をやり込める様な事云ふぢやありませんか。なるほぎあれぢやア妹も、癩にさわつて側に居られない筈です。」

「それにお〇さんは、ちつこ温和過ぎる方だから子。」

「全くですよ。私だつたら毎日々々、小言云はずにや居られやしません。それにお前さん、まだ誕生前の子供をつかまへて襁褓もろくにあてがつてないんでせう。」

「それぢやア垂流しかイ。」

「まさかさうでも無いんですが子。伺さか云ふ變テコな、さうく……カバアミかバカアミか云ふもんですの。それがあてがつたる斗りなんですが、あんなものぢや逆も保ちやアしません、だから衣服がみんなだいなし……」

「なんだつてそんな事しこくんだらう？」

「襠保なんぞで足をまいこくこ、發育が悪くなるこ云ふんですさ。」

「そんな事もみんな學校で教はるんだら！ やりきれないねエ。」

「又しても學校攻撃です。かうなるこ私だつて、穿いて居る袴の手前も、少しは癩にさはら

「すに居られませんか。が、また考へて見るこ、丁度私の學校を出て家庭の人になつて居る方の中に、それに似たのがある様に思はれるこ、何だか耳が痛くなる様にも感じました。」

「また先様では、わざこ當てつけでもする様に、氣のせいか時々此方を見ながら、」

「お互ひに若い時分にやア、そんな事は教はらなかつたねエ。」

「ですから學校出はけんのですよ。自家のなんども、何うかはやく貰つてやり度いと思ふんですが、恐くつてうっかり手が出せないんですよ。」

「其所へ行くこ私許のは感心だ子。尤も學校は早く出で、それから御奉公に上つたさか云ふんだが、第一これ(裁縫の手真似して)は

乗 り 越 し
出来るし、糞物は上手だし……なアに、こゝ（顔をさして）はあんまり好くはないが、その代り二時間なんて、鏡を覗きしてゐるんぢやなし……」

「ほんごに、それが當然ですよ。」

「所がお前さん、今の若い者にやア、それぢやア氣に入らないんだ子。」

「けぎも、それは當座だけですよ。なんほ容貌が好いつたつて、四十五十まで保つんぢやなし……」

「お互ひの様になつちやアおしまひだねエ。ホ、。」

「云ふ時チリンと鈴がなるご、切下けは伸びあがつて、

「何所でせう此所は？」

「云ふご、束髪も窓から覗いて、

「アラいやだよ、薩摩ッ原ぢやないか。」

「そりや大變。乗り越しちまつたんです子。」

「二人は急に狼狽へ出し、車掌を呼んでかけ合つて、切符を切りかへて貰ふのを見るご、これは前の金杉橋で、目黒行に乗りかへる筈だつたのでした。」

流石に當人達も極り悪さうに、ごつかはご車を出て行きましたが、その様子がまたをかしいので、今までの高話に、等しく耳を悩まされて居た車の中の人達は、互ひに顔を見合はせて、好い氣味だご云はぬ斗りに、ニヤリと笑ふものもあれば、ブツと噴き出すのもありました。

私も無論怵へかねて、ハンケチを口に當てはしましたが、それにしても今の話が、私の常から知つてる○子さんや、△さんに似てるのを思ふと、あの老婦人の癖のある聲が、何時までも耳の根に残つて居るご同時に、何時か腋の下に浸んだ汗も、また急には乾かないのでした。
そして私もお嫁に行つたら、またあんなに云はれるのかと思つたら、何だかいやなア氣がして來ました。

附録 大禮服

光秀の妻は大切な髪を賣り、一豊の内儀は必要な馬を買つた、何れも亭主孝行の手下、さうした貞女の物語を、修身の時間に毎度繰りかへされたお蔭で、依居夫人梯子は天晴れの良妻、良人榮之進が年來の志望を達して、高が舊幕の御家人の子の、私學出身の古參辯護士から、一躍高等官二等の局長を贏ち得たのは、政黨内閣實現に云ふ、時節到來の賜物ではあるが、梯子夫人が内助の偉功も、亦正に認めねばならぬ所である。
去る程に今年も押しつまつて、初めて味を知つた官吏生活も、廿

大禮服

八日の御用仕舞も成つた。

毎年ならば此頃から、家族を引連れて箱根へ出かけ、學生の頃から行き馴染んだ、某の温泉宿の奥二階に、命の洗濯をする所であるが、來年は榮之通恰も五十、人生の定命拂込濟もなつて、はじめて官人になつて見るさ、さうした身分の者でなければ、残念ながら眞似の出來ない、新年参賀云ふ事が、一期の思出何うか行つて見度くもなつた。然しそれには大禮服が要る。その大禮服を作るには、又少からぬ資本が要るのだ。これにまた胸をつかへさせて、止むを得ずんば所勞にして、やはり近縣へ雲隠れしようか、弱い音を吹きかけるのを、梯子夫人聞くに得堪へず、

「そんな事云はないで、何所かで借りたら可いぢやありませんか。」

「まさか損料も氣が利かんから子。」
「ナニ、損料で借りないでも、きつこ何所かにありますよ。お待ちなさい！」

「少時小首を傾ける間に、はたこ思ひ當つたのは、梯子夫人には聊か縁つゞきになるが、日ごろ常は無沙汰勝で通して居た、信濃町の木田云ふ人だ。彼は以前は知事までつこめた男、屹度勅任の大禮服があるに相違無いさ、斯う目星をつけた様子は、」
「私木田へ行つて借りて來ますワ。あの人のなら背も高くは無し、良君には丁度好いでせう！」
「だが、もう拂つてしまやしないか子。」
「さア、何うだか知りませんが、彼所は別に困つてやしないし、ま

大 禮 服
たその中出る氣で居るから、まだそんな事しやしませんまいよ。兎に角行つて聞いて見ますから。」

梯子は手ばやく身支度をするに、春支度の忙しい中から、少し計りの手土産を持つて、四谷の木田家へこやつて来た。

木田では珍しい梯子の入れに、何の用か少しは訝かつたが、何しろ先方は新勅任の奥様、まさか金の無心でもあるまいに、座敷へ通して來意を聞くに、大禮服が借り度いのだと云ふ。

磊落な木田は無造作に笑つて、

「ハ、ハ、大方そんな事だらうと思つたから、實は此間から出しにいたよ。」

「さりとてはお手廻しだ。かう出られるにまた梯子は、何だか輕

い侮辱をうけた様にも想ふ。

「イエ、なに……此間も三越でかけ合つたんですが、何しろ此頃は立て込んでるんで、さうしても間に合はないつて申すんですもの。」

「さ、負け惜みも云ひ度くなつた。」

「イヤ、新規に拵へるのは馬鹿々々しいよ。さうせ一生に何度か云つて、算へる程しか着ないもんだ。何も決して恥づる事はない。自家の持つてつて着せなさいも……だが、依居君に合へば可いがナ。」

「それは屹度合ふと思ふんです。丁度おんなし體の格好なんですから。」

「イヤ、實は私にもちご窮屈なんだ。……何ならちつこは直して
も可いよ。さうせ私に用は無いんだから。」

「兎も角も拜借して参りませう。」

此所で首尾よく借りる事になつたが、背廣一着入れるのでも、只
の風呂敷では幅つたい。まして苟も大禮服なるこ、大きな桐箱に
入つて居る外に、帽子や劔までついて居るので、一寸手輕には運び
かねた。

仕方が無いから車を備つて、それへ積んで家へ歸つた。梯子は見
事使命を果して、さながら鬼の首を得て來た形だ。

家には丁度客が來て居た。然しそれは松倉云つて、主人も同黨
の院外組の幹部、平牛から懇意の間だから、此方も遠慮する事はな

いこ、關はずその室へ入つて來て、

「行つて参りましたよ。」

「オ、御苦勞だつたな。何うした、あつたか。」

「丁度御座いましたの。直ぐ借りて來ましたよ。」

「まづ復命しておいてから、改めて松倉に向つて、

「オヤ入らつしやいまし！押つまりまして御座います子。」

「これは奥さん——さぞ御忙しう御座いますやう。然し今度のお正

月こそ、眞におめで度う云ふべしです子。大いに御馳走に成りに

來ますよ。」

「アラ、また松倉さんが！」

「こ、手で斥ける。眞似をしたが、腹は決して悪い氣持では無い。」

大 榮之進は待ちかゝて居た様に、

「ぢやお前持つて来たのか？」

「何、人車で一所に持つて来ました。」

「ドレ、見せて見ろ！」

「へい……。」

ミ、云つたが松倉に氣をかねて、まだ直ぐには取りに行かない。松倉は氣にして、

「何だい？ 君！」

「ハ、ア、大禮服さ。松倉君だから關はんよ。さうせ樂屋は知れてるんだ。はやく持つていで！」

「然うです子。」

梯子は次の間へ立つと、大きな桐箱を抱へ込んだ。松倉はうなづいて、

「なるほご元日の御用意だ子。」

「ナニ、わざわざ誂へるのも愚な事だから、一寸親戚へ借りにやつたのさ。」

ミ、良人は本音を吐くのだが、梯子はそれを引取つて、

「何しろ三越でも白木屋でも、此暮末にはさても間に合はないんで御座いますの。」

ミ、またしても辯解する、元の辯護士夫人たるに恥ぢない。

榮之進は、また子供か歳暮でも貰つた様に、はやく中を見度がつて、自分から箱の蓋を取つた。

大 禮 服

「なるほご、これなら立派なもんだ。まだあまり古くない様だな。」
「さうして、これなら新調で通るこも。一つ着て見たまへ！」
「さア……………」

榮之進は流石に羞んだが、

「でも一度着て御覽なされた方が可うございますよ。もしか直させる様だも、直ぐで無ければ間に合ひませんか。」

「なるほごそれも然うだな。ぢやア失敬して一寸やつて見るか。」

「無論豫習は必要だ、觀兵式でも豫行があるからナ。」

「ごりや、それでは着て来よう。」

こ、納戸の方へ出かけるこ、梯子はまた大きな箱をかへて、その後から急いでつづいた。その弾みに松倉の飲みさしの茶が、裾の煽

大 禮 服

りて茶托ごこ覆つたが、梯子はそれに目もくれない。仕方がなしに松倉は、自分のハンケチで拭かうとしたが、それも上側を撫でた計りで、あこは緞通に吸ばせてしをつた。

納戸へ来た榮之進は、まづ着さしのワイシャツを下に、その大禮服を着て見るこ、それを聞きつけて隠居所からは、母の西子が孫の花子を連れて、眼鏡まで持ちながら見物に来る。

「門前で友達と遊んで居た大郎も、母が大禮服云ふものを持って歸つたこ聞いて、當獨樂の天下を他に護つて、これも納戸を覗きに來た。」

下女の清も手傳ふ風で側へ來れば、書生の橋までが、郵便を持って來た序に、廊下に立つて目を張つて居る。

大 殿
殆んぎ一家が一室に集まつた、事あり氣な有様に、はては飼犬べ
ルまでが、履脱石へ来て首を伸ばし、耳を立てたり、鼻を蠢かした
り……………

其中に太夫身支度も出来た。

「なるほごこれは丁度好い。まるで誂へた通りだ。これで腋がもう
少し樂だご、正に満點ご云ふ所だが。」

ご云ふ。

梯子は心配して、

「そんなら少し直させませうか。」

「ナニ……………直すには及ばんだらう。我慢の出来ん事もないから。」

「ちや、我慢なさいますが。」

「我慢するくい。」

云ひながら剣を着け、帽子も被つて見て、

「ウン、これまで丁度合ふから妙だ。」

ご、云ひながら姿見の前に立つて、我知らずニツミしながら。

「ごうです祖母さん、似合ひますか？」

酉子は眼鏡越しにちつと見て、

「ウン、似合ふよ似合ふよ！ 立派なもんだよ。私も畫や寫眞では

見たが、側で見るのは初度だよ。これはみんな本金かねエ。」

ご、恐さうに金モールに觸つて見る。

「まさか本金ぢやありませんが、可なり重いもんですよ。」

「さうだらう子。昔なら緋緘の錠ごでも云ふ所だらう子。」

「ハ、まづそんなもんですよ。私だつてこれが初陣なんですから。」

太郎はまた佩剣に目をつけて、

「ヤア、いなア、サアベルく！お父さん、抜いて御覽なさい！」

「よし、抜いて見せてやらうか。」

榮之進は抜かうとしたが、思ひの外樂に抜けない。

「およしよ、あぶないぢやないか。」

西子が止めたが、その中にやつと抜けた。けれど中身はひきく錆び付いて、まるで小牛の尻尾の様だ。

「なアんだ、けちなのだ！」

太郎は無遠慮に嘲ける。榮之進も釣り込まれて、

「なるほごこれは酷い赤にしだナ。だが文官だからこれでも可いんだらう。」

云ひながらまた納める。今度は花子が帽子の羽毛を指して、

「まア綺麗ねエ。鵝鳥でせうか。もう先私もあんなの持つてたワ。

ねエ阿母様！あれもおんなじでせう？」

「ア、あのシヨールか子。」

「ね、でも今はもう流行らないの子。」

「なに、この羽毛か。」

榮之進は帽子を脱いで眺める。清が今度は口を出して、

「私の先につりました所の旦那様のは、それが黒で御座います。」

たよ。」

「云ふのを、梯子は待つてましたよ云はぬ斗りに、

「それは奏任官のたよ。勅任官ださみんな白さ。」

得意になつて教へるさ、さも感心した様に、

「へ、エ、やつぱり白の方がお立派で御座います子。それにこの御服の方が、金も餘計ついこりますよ。」

「それは當然さ。位が一等上なんだから。」

かう云つて今更の様に、胸の透を見て気がついた。

「オ、然うく、勳章もつけて見ませうか。」

「さうだ。みんな持つて来い！」

梯子は用箆筒の抽斗から、勳章の函を持つて来た。

「此所に丁度付ける所が出来てる。四つもあるぞ。」

「ですから……勳章さ、御大禮記念章さ、それから赤十字社のこ

……もう一つは何だらう？」

「憲法發布か、銀婚式かだが、生憎此方にはそんな物は無いワ。」

「まアこれ丈つけて見ませう。」

梯子は大切さうに勳章をつける。榮之進は頷をあげて、鼻の下を伸して、下眼を使つてそれを見て居る。

清はまた口を出した。

「先のお邸の旦那様は、喉頭の處へお下けになりましたよ。」

「云ふ。それは勳三等だからだ。生憎此所のは代議士さして貰つた、勳四等のしか無いのだから、胸から上へはさけられない。梯子

は忘々しきうに、餘計な事は云はなくても可いミ、尻目に云はせて一寸睨んだ。

が、子供は更に無遠慮だ。

「ヤア可笑いなア、服斗りが餘所行で、勳章は平生のがついてらア。」

ミ云ふ。

「馬鹿云へ！これが餘所行だよ。平生のはボタンの様な、ソラ、始終襟につけてるぢないか。」

ミ、榮之進は眞面目に説明したが、太郎は頭をふつて、

「ウーン、餘所行のは肩所から、すつこ此方へ大きく掛かるんだ。」

ミ、反對にやりかへす。それは一等以上の大綬の事を云ふのだ。

ミ思ふに榮之進も、只苦笑する外はない。梯子は照れかくしに、

「ナニ、此次にはあれも出来るんだだけれども、今度はこれで間に合はせよのさ。」

ミ、苦い嘘まで吐いてしまふ。

その中にすつかり出来上つた所で、もう一度姿見を見ながら、

「ごうやら一人前のお役人になつたナ。」

「ほんこによく似合つたよ。このお正月にはその風俗で、是非寫眞をおごりよ。……、あゝ阿父様が居なさつたら、ごんなにお喜びになるだらうねエ。」

ミ、祖母は祖母らしい事を云ふ。

「あゝほんごに寫眞取りませうよ。家内中で子。」

花子が賛成すれば、梯子もなづいて、

「さうだ子。ぢやア元日の御午後、家へ寫眞屋に来てもらつて、
一同で撮つてもらひませう。」

「それもなるほご可いだらう。」

「云ふ中に思ひ出して、

「イヤ、松倉が待つてるだらう。」

「云つて脱ぎかけるこ、

「いゝね其まゝ入らしつて、一度見せておあけなさいよ。」

「何だか自慢する様で可笑いぢやないか。」

「ナニ關ふもんですか。内輪同士ぢやありませんか。松倉さんだつ

て今度の次には、まゝ着る時節が来るんでせうから、後學の爲めに
見せておあけなさいよ」

「なるほごそれも道理だ。ぢやア一つ見せてくるか」

榮之進はその大禮服のまゝ、右に帽子、左に劍の柄を握つて、但
し少しは極り悪さうに、以前の座敷へ入つて來た。梯子はまたその
後からつく。

「イヤ、失敬々々！ 序に一つ見て貰はうか子。」

わざと無造作に云ひながら、松倉の前に立ちましたかゝるこ、

「ヨウ、立派々々！ 天晴れ武者振、威風四邊を拂つた子」

「まア冷評さすによく見てくれ！ 可笑い所は直さんけりや成らん
から。」

「ウム……後を向いて見たまへ！」

「斯うか？」

「すつかりお誂へ向きだ。」

「少し腋が窮屈だがねエ。」

「さう云やアちつこ合ひ過ぎる位だ。もう一遍前を向いて！」

「むくよ。」

「かうなるこ残念ながら、勳章が四等ぢやア貧弱だ子。さうしても

二等以上でないこなア。」

「イヤ、それは一言も無いよ。今も子供にやられた所だ。」

「君なんぞはまだ可いが、今度の大臣の仲間にやア、親任官でありながら、勳四連中が多いんだから子。宮中席次がいくら上でも、胸

を見られちや振はん事夥しい。」

「然し君其邊が平民内閣の特色だよ。」

「そんならいつそ此際に、大禮服や勳章を廢して、米國式の黒斗りにするさ。その方が寧ろシンプルで可いぜ。」

「飛んだ所で民本主義を持ち出すこ、梯子夫人は眼を圓くして、

「でも陛下の御前へ出るんですから、やつぱり金モールの服で無けりやア！」

「こ、これは一廉皇室中心派だ。」

その中に松倉は、頭の尖から足の先まで見て居たが、

「オ、君いかん／＼！」

「エツ、何うして？」

「君、足が只の足袋ぢやないか。」

「ハ、ア、こりやア氣が付かなかつた。」

「せめて靴下なら調和が取れたが、紺足袋ぢや滑稽だ。これがほん

この龍頭足袋だ子。」

「ハ、まゐるで會我の家だ。」

「榮之進も一所に笑ひ崩れたが、梯子はまだ眞顔で、

「だつて松倉さん、家内で靴も穿けないぢや御座いませんか。何な

ら持つて参りませうか。よく拭かしこきましたから。」

「、負惜みを云ひかけるこ、松倉も本氣になつて、

「ですが奥さん！ 只の靴ぢやいけませんよ、大禮服にやア、ラッ

クに極まつてます。あの添の様にピカ／＼した奴……」

「よくは磨かして御座いますが……」

「いくら磨いたつて、只の革ぢやアいけないんです。」

「、それは松倉の方が心得て居る。」

「梯子は少したぢろいたが、

「アノ、燕尾服の時ぢやアいけないんでせうか。」

「、不安さうに良人を見た。」

「榮之進は考へて、

「あれでも可い筈だが、何しろもう古いから、一つ奮發しようよ。」

「でも今から誂へたつてこても間に合ひませんよ。」

「ナニ、出来合で澤山さ。直ぐ三越へ電話かけろ！ 無けりやア大

塚でも内田でも、速い方が可いぞ。」

「はい！」

梯子はいよく慌て氣味で、電話の方へ立つて行くこ、榮之進もその後から、

「何しろ窮窟だ。脱いで来よう。」

こ、同じく座敷を出て行つたが、やがて引かへして来た時は、元の米琉の綿入に、同じ物の書生羽織、

「イヤ、吾輩等にはやはり此方が樂だぞ。野人禮に習はずだ。」

こ、無造作に胡坐をかくこ、

「全くさう出て来られないこ、君僕で會話をする事が出来ん。今の様な風俗で居られちやア、義理にも閣下こ云はなけりや成らんから

なア。」

こ、客の方でも膝を崩して、前の菓子鉢へ手を出した。

かうして何か話し合つて居たが、やがて松倉の去らうこする時、榮之進の手函の中から何物か、仔細らしい一封が渡されるこ、

「イヤ、確に確に！何卒總務に宜敷云つてくれたまへ！」

「總務ぢやない、大臣だらう？」

「ハア、その通り………僕はまだ野人だから、つひ辭令に習はんもんでぞ。」

こ、松倉は頭を掻く眞似をした。

松倉の歸つた後の依居家は、又しても大禮服が問題こなつた。「これを着て一度お墓參するこ可い。」

「西子が眞顔で云ひ出したのは、笑の中に埋め去られてしまつた。先刻も出た一家中の撮影問題は、いよく實行案に進んで、その時は良人が大禮服だから、梯子も無論白襟紋附、花子も裾模様も極まつたが、それには帯がちこ負けるから、今から急いで高島屋へ行つてこ云ふ、緊急動議も亦容れられるのであつた。」

さうかと思ふこまた太郎は、

「ぢやア父様、箱根へは何時行くの？」

と聞く。

「元日が濟んでからさ。」

「ぢやア箱根へも大禮服？」

と云つてまた皆に笑はれた。

その中に靴が来た。試みに穿いて見るのに、三足屈けて来た中で一番價の貴いのが、さうやら足に合ふ計りで、他はこても穿まらな

い。免も角もこれにしてこ云ふので、靴まで皆揃つてしまつた。此上は晴れの元日を待つ計りだ。

何卒お天氣にしたいものだ、序に温くあつて欲しいと、祈つて居た甲斐は半分丈あつて、一陽來復のその朝は、流石に日本晴の上天氣、初日も名残無く拜まれたが、その代り滅法冷めて、水道も容易に出ない位だ。

吉例の屠蘇雜煮を祝ふと、いよくこれから參内、拜賀！ 大禮服着用の幕もなつた。

大 此間豫習がしてあるので、難無く一着に及んだが、榮之進は身を
慄はせて、

「馬鹿に寒いな。こいつは前を合はす事が出来んからたまらん。は
やく外套出してくれ。」

こ云ふ。梯子は怪訝な顔をして、

「外套なんぞ着てらつしやるんですか？」

「でも無しぢや出られんだらう。」

「そんな事があるもんですか。何所の方だつて、大禮服にやアみん
な外套無しですよ。またそれで無けりやア、折角着た甲斐が無いぢ
やありませんか。雨でも降りやア知らないこも、人車だつて幌無し
で行かうつて云ふのに、外套なんぞ着ちや何の役にも立ちません。」

「だつて寒いから仕方が無い。なんほ大禮服着たつて、風を引いち
やつまらんからなア。」

「そんなら上へもつこ召したら？」

「ウム……それでも可いなア。」

「シャツを二枚にして、それでも足りなきや綿を負つてらつしや
い。」

「ぢやア然うしやうか。まだ時間があるから。よし、大急ぎで着直
しだ。」

こ、折角着たのをまた脱いで、下へ十分に着込をして、さて又元の
通り着て見るこ、只さへ窮屈だつた腋の所が、一層迫つて痛い位に
なつた。

大 禮 服

「さうですそれで？」

「おかげで温くはなつた様だが、その代の馬鹿に苦しい。」

「苦しいッたつてちつこの間ですよ。」

「何事も辛抱が肝腎か。ドレ、それぢやア阿母さん行つて参ります。」

「………歸途に三四軒まはつて、正午迄にやア歸つて来るから、寫眞の方を宜しく頼むよ。」

「わゝ、それは大丈夫、みんなちやんこ支度して待つこりますから」

こんな會話の中に玄關へ出た、家内中にぞろぞろ送られて。

玄關には今日丈特に頼んだ、差引附の人車が待つて居て、敷臺の前には新調の靴が、顔の映るほご光つて居る。

先是近所には、夙くも太郎がふれてまはつて、

「今日僕のお父さん、大禮服を着て御所へ行くんだよ。」

さあつたので、門前にはその小さい友達の一群が、口をあけてのぞいて居た。

榮之進は四邊を見まはして、軽い會釋をくれながら、やをら靴を取つた。そして手勝手の左から穿かうとするのに、思ふ様に入らない。それも其筈、足袋も寒いので重ねて居るのに、大禮服がしやちこ張つて思ふ様にあがきが取れず、片足では立ちきれない。

「こりやいかん。………椅子を持つて来い！」

「ハッ！」

桶は駈込んで、應接間から椅子を持つて来た。

大 禮 服

榮之進はそれをかけて、又靴を穿かうとするが、まだ甲が支へたり、踵がはみ出たり……。

焦慮れば焦慮るほど尙はまらない。見兼ねて梯子が手傳はうとするが、子供に足袋を穿かせるのちがつて、これ計りは傍から何うする事も出来ない。

「ア、熱くなつた。」

こ、一休してホツ息を吐く榮之進は、只さへ居蘇の利いて居る顔を、もう燃ゆる様に赤くして居る。

「何うしませう？ 彼方になさいますか。」

「待て〜！ はいらん事はあるまい。此間たしかに入つたのだから。」

大 禮 服

こ、また努力して穿かうとしたが、今少しですつほり行きさうなのに、勢こめてウンミ引くこ、それに力が入つたせい、何所がでビリツ音が出た。

「オヤツ！」

こ云ひながら梯子が見るこ、南無三寶大禮服の、右の袖附が四五寸破れて、下から眞錦が舌を出した。

「アラ良君大變〜！」

「ナニ破れた？」

そつこ手で觸つて見た榮之進は、

「馬鹿！ チョツ！」

こ、大きな舌鼓をうつて、靴を敷臺に叩きつけて、そのまゝ奥へ脱

新しき美しいま

大 題
兔の如く。梯子は却つて處女の様には
「アラ良君、何うなすつたの？」
ミ。これはもう泣きさうである。

終
女の學を向

大正十年十二月二十日印刷
大正十年十二月二十五日發行

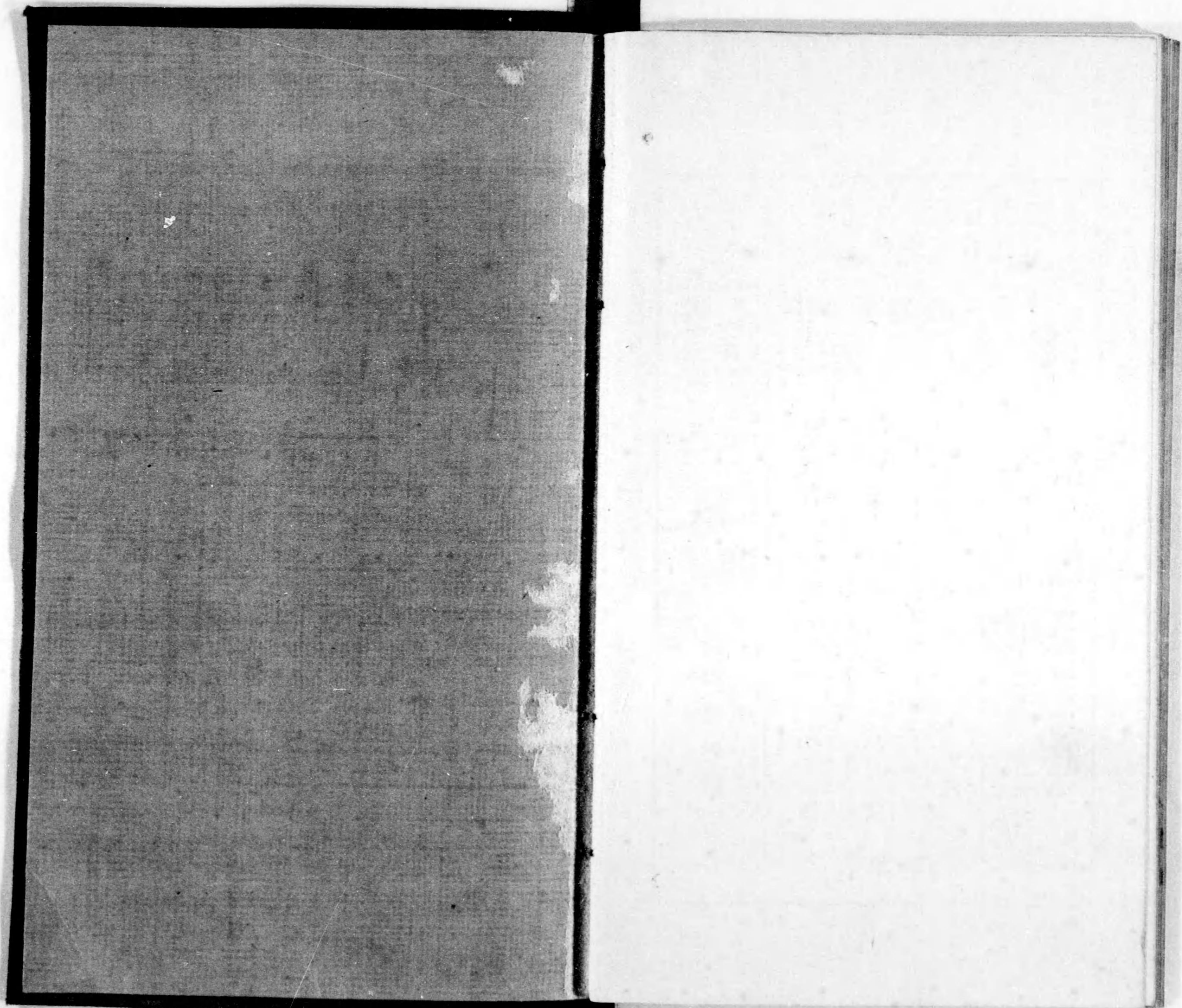
□ 定價金壹圓 □

— 不許複製 —

著者	巖谷小波
發行者	博多久吉 <small>大阪市南區大寶寺町西之丁二十二番地</small>
印刷者	紅野次郎 <small>大阪市壇町通四丁目十二番地</small>

發賣所

大阪市南區大寶寺町 佐野屋橋筋四へ入	博多成象堂 振大七三三 電南壹壹七七
東京市神田錦町 三丁目十八番地	東京成象堂 振東四八三七 電神三四九六



10/1
114

終

